

「それぞれの子どもらしさを求めて」より (十)

名古屋市立大高幼稚園



サンタさんぼくの家にきてね

友だちに出す年賀状の、版画すりを終った女児四人が、ジングルベルの曲にあわせて、リズム遊びをはじめた。手をつなぎぐるぐる走りまわっていた。教師も、

「入れて」

と歩いていっしょに遊ぶ。

「歩くところも入れてみようか？」

と聞いたが、

「走るだけでいいの」

といて、曲の感じもあまり関係ないといった調子で走っていた。そのうちに

「ここは歩いてみよう」

とか、

「ここは座ってもいいね」

とかいいながら、いろいろ表現が変化してきた。

「きよしこの夜」の曲では、八分の六拍

子のリズムをからだ全体を使ってうまく表現し、曲想にひたっているという感じをうけた。いままだままごとをしていたつよし

とひろゆきは、ジングルベルの曲にさそわれて、トライアングル、タンブリンを持って参加してきた。曲の感じをよくうけて、ふたりで楽器をうまく使いわけているのにおどろいた。保育室のすみで絵本をみているのぼるが、楽器をいっぱいもって、

「サンタクロースのおじさんだよ」

といて入ってきた。一週間程前に、しんやが作ったサンタの帽子と、教師が作った服があったので、のぼるに着せる。袋には子どもたちの作品を入れてやった。するとままごとコーナーの方で、

「もう、ねよう」

とふとんの中に入り、しんやが、

「もしもし、サンタさん、サンタさん、早くきてくださいな」

と電話をしている声がかこえてきた。



きょうの遊びをみていると、子どもたちは、遊びをはじめの前に話し合いをしたのではなく、また、役割をきめたわけでもない。全く自然にそれぞれの角度から遊びに入っていたのであるが、子どもたちのイメージの豊かさに驚いた。そこに、クラスの子どもの円満な人間関係が働いていることを感じた。

教師が計画して組織だてた従来の単元活動の中では、とても考えられない活動が展開されたように思う。

(五歳児 十二月十九日)

### あつ サンタクロースの手紙だ

きょうは幼稚園のクリスマス会である。ツリーの前の、大きくふくらんだ袋の上に手紙がおいてある。それをみつけた、ひろ

ゆき・とし子・みさ子らが、袋をかこんで話をしていた。

「あつ、何かあるよ」

と手紙を手にしたが、みることをためらっていた。

「あれ、ももぐみとかいてあるよ」

「じゃあ、見ようか」

「見たいな」

「あとの楽しみにしようか」

「うん、あとの楽しみで、いいが」

「ちようど、そこへお茶をもつて、業務士

のおばさんが入ってきた。おばさんが、

「何かあるの？」

ときいた。やはり見たかったのであろう。

みさ子が、そろりそろりとあける。

「ああ、手紙だよ」

と聞いてひろゆきがよんでいくが、ときれとぎれのよみ方なので内容はよくわからなかったようであった。あとの楽しみということで、それぞれの遊び場へ散っていっ

た。ひとり残ったみさ子が、長い間手紙をみて、袋の上に返し遊戯室へいった。ちか子もひとりで見返していた。このようにして、入れかわりにきては、こっそりみていく。

「楽しいな」

「ほんとうにサンタクロースの手紙か？」

「園長先生が、かいたんだよ、きつと」

「ちがう、ほんものだよ」

など、話し合っていることはがきこえてきた。ひとりひとりの思いが、その会話から想像される。



クリスマス会のはじめに「サンタクロースの手紙よ、なんてかいてあるのかな？」  
といたながらみんなによんできかせたのであるが、今朝、ひとりひとりが、こっそりよんでは返していたようすが、非常に印象的であった。この方が子どもの心に深く

残るものがあることを思った。カードを開くと、サンタクロースが飛び出す立体的なものや、夜空に星がキラキラ輝く中から、エンゼルがでてくるようにくふうしたものと、デザインや、そのカードを子どもにみせる扱い方も、それぞれ教師のアイデアが変っていて楽しかった。形式的に、ただよんできかせるのでなく、どのようにすると子どもの心を楽しく豊かにすることができるか、サンタの手紙ひとつをとってみても、たいせつにしていきたいと思った。

(五歳児 十二月二十日)

こんどわたし おばあさんよ

先週の木・金で生活発表会は終った。しかし、遊戯室は終日、劇あそびごっこでにぎわっていた。自分たちでステレオをうまく使いこなし、「赤ずきん」「お菓子の家」のレコードを交替でかけながら、すごく張

り切って遊んでいた。役割は発表会当日とはことなり、一回終るたびに、

「わたし、こんどおばあさんがいいわ」

「じゃあ、わたし小鳥にして」

と全く自然に自主的に役割がきまり、役をかわりあいながらいろいろな役をのびのびと演じている。小道具を出したり入れたりと、喜々として楽しんでいた。「お菓子の家」は、他の組がしたのであるが、いつのまにか自分たちのものにして演じていた。

◇ ◇ ◇

「赤ずきん」では、おおかみ、「お菓子の家」ではおばあさんの役になりたがる。いくつか他の園の先生が、「おおかみとか、おばあさんのなり手がなく困る」という話をきいたことを考えると、この役に人気があるのは不思議な気がした。とにかく、意欲的に自信満々に演じている子どもたちをみて、教師はしごくご満悦であった。

(五歳児 二月十九日)

せんせい バドミントンしてあげる

ふみおたちが、

「先生、すわりほうや、やろう」

と誘いにきた。教師が

「すわりほうや？ やりたくないもの」

というところ、

「だめ、やらなきゃだめ、みんなで先生

を引っばって、いこう」

とうとう園庭へつれ出されてしまった。

「先生、違うものがいいなあ」

と少しすねたようにいうと、

「じゃ、何がいい？」

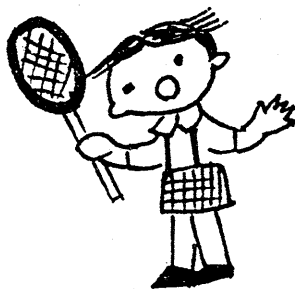
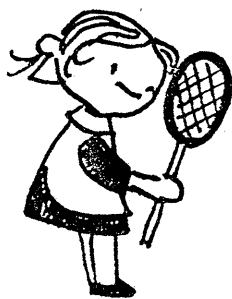
とみさ子がきく。

「バドミントンがしたいわ」

「じゃ、バドミントンしてあげるわ」

「それやろう」

とみんなが、賛成してすることにきまっ



た。教師が

「ああ、よかったうれしいわ。ありがとう」

う  
といて二人対二人にわかれて、試合開始。サーブをうまく打ちかえすことができず、何回もやり直す。はねを拾う時間の方が長いのだが、チームは根気よくうてるまで待っている。点を数えている子どもの点数の数え方がおもしろい。どうした時に点になるのか、別にきまっていなくてその子どもが自分の思い通りに点を入れていく。しかし、だれも文句をいわない。そして、一応どちらかが十点になると、ゲーム終了である。

ゲームをしている子どもは、

「今、わたしち、何点？」

と、ときどき聞きながら懸命に打ったり打ちかえしたりしていた。

「あと一点で勝ちだよ、がんばろうね」

とはげまし合っている。とにかく、子ども

たちは、何となくルールを理解し合っているようで、けっこう楽しんでた。



待つ時間が長いのに、途中でやめる子どももなく、その根気よいのに感心した。子どもだけに通ずるおもしろさがあるようだ。はじめに教師がやんちゃをいったので、子どもたちは気を使っていっしょうけんめいに遊んでくれた。この場合は子どもと逆の立場をとってよかったと思っ

た。(五歳児 二月二十六日)

### わたし零歳児教室のせんせいよ

とよ子を中心としたグループが、階段の踊り場で何かをしていた。(四、五日前にも同じような場をみたことがあり、そのときは何も教えてくれなかった)

「何かおもしろそうね、入れてね」

という、

「先生、これは零歳児教室だよ」

という返事であった。とよ子が先生になり、階段を使って、いろいろな遊びをするのである。一時間目は、足を開閉しながら一段ずつおりていく。兎になってぶ感じである。二時間目は階段に手をつき、腕立てふせのような姿勢でのぼる。とよ子とび方をみていると、さすが先生だけあって、実にリズムミカルにとんでいく。三時間目はおやつ時間である。生徒を階段のところに並べて、

「ジュースなら何がいい？」

「果物は？」

「アイスクリームは、チョコレート？ふつうの？」

とひとりひとりに聞いていく。

「ファンタのオレンジ」

「チョコレートアイスクリーム」

とそれぞれが答える。ようじがあって、保

育室に行つてみると、すわ子がきて、

「先生、五時間目はものすごくきびしいんだよ」

という。

「何がきびしいのかな」

と思いがら行つてみると、今度はゲームをするのだそうである。教師ととよ子先生のグループにわかれて、それぞれひざに、子どもをのせて、階段をおしりであがっていくのである。のせているものも、のつているものも、かなり力のいる運動であった。それで、

「きびしいよ」

といいきたのかもめない。新しい子どもが参加してくると、一時間目から、くりかえしていく。脚力、腕力を必要とする変わった遊びであった。一回で教師はのびてしまった。三時間目をおやつ時間として、適当に休息を入れているのには、感心させられた。



階段での遊びは危険をとまらうので十分注意しなければならないと思うが、階段という場をうまく利用したおもしろい遊びであった。また、三学期になると、学校ごっこか幼稚園ごっこがよく出てくるが、先生や生徒になってみたいという子どものあこがれが、ことばや動きの中に感じられた。紙を重ねてホチキスで止め、帳面をつくり、鉛筆で小さい絵や字をかく。先生、わたし勉強しているの。"こんな遊びをよくみる。小学校入学に不安と期待を同時に感じているのであろうか。

(五歳児 二月二十八日)

入れて・だめ

〈四歳児〉

「入れて」「ひとりならいいよ」

「入れて」「猫でならいいよ」

「入れて」「そのかわり、あんた赤ちゃんだよ」

「入れて」「ここはふたりしかはいれないもん。むこうでやったら？ ままごとのおもちゃあげるから」

「入れて」「〇ちゃんはおかあさんばっかりになるから入れてあげない」

「入れて」「せまいからだめ」

「入れて」「あんた、子どもになる？」

子どもならいいよ」

「入れて」「猫（ぬいぐるみ）もってこないかん」

〈五歳児〉

「入れて」「さぶとんが三つだから、三人しかだめ」（または、部屋とか茶わんなどのときもあ

る）

「入れて」「〇ちゃんは、すぐ「やめた」って、やめるのでいかん」

「入れて」「あんた、三番姉さんよ」

「入れて」「スカート（遊び用）はいとらんでいかんよ」

「入れて」「じゃ、お医者さんになってね」（しんせきの人やお客さんのように、ときどきかかわる立場の役であれば入れる）

「入れて」といって遊びの中へはいろいろと思っても「だめ」といわれ、教師に「あの子、いじわるするよ」と訴えにくることがよくみられる。「入れて」ということばに対する子どもの反応にはいろいろあり、拒否される理由がはっきりしている場合が多いことを思う。ままごとの例で考えると、場の広さと人数、道具の数と人数、メンバーの役割などの条件や日常の子どもの

動きなどが拒否する理由になっていることが、ことばの中からうかがえる。教師は一方的にいじわるするといってきた子どもの側から遊びをみるのでなく、いじわるをいった子どもの側からも考えてみることにしたいせつであると思う。双方の立場を考えた教師の適切な指導が、子どもの感情を円満にしていこうと思う。「仲よく」ということは、いっしょに遊んでいる状態のみをさしているのではなく、お互いの立場を理解し合って、ゆずり合い許し合うことのできる心の広さをいうのではないだろうか。

（今回で終了です）

